

令和4年度第2回 藤島地域教育振興会議 会議録（概要）

1 会議の開催概要

- 日 時 令和4年11月17日（木）18時30分～20時15分
- 場 所 藤島地区地域活動センター大ホール
- 出席委員 18人（うち代理出席2人）
齋藤昭彦、叶野明美、成田信一（代理：石川豊明）、高橋俊一、近藤直志、菅原治、今野貴行、加藤正広、中田英幸（代理：丸山裕司）、上林祐樹、佐藤謙、安在堅、前田範子、渡部高生、遠田良弘、井上佳奈子、齋藤直美、武田洋
- 市出席者 〈教育委員会〉
教育長 布川敦、教育部長 本間明、参事兼管理課長 清野健、
学校教育課指導主幹 渡邊智、学校教育課指導専門員 落合正幸
管理課庶務主査 奥山真裕、
〈藤島庁舎〉
支所長 成田讓、総務企画課長 小林正雄、市民福祉課長 長谷川郁子、
総務企画課地域まちづくり企画調整主査 齋藤優、総務課主査 後藤春雄
- 傍聴者 17人
- 会議次第
 - 1 開会
 - 2 挨拶（鶴岡市教育委員会教育長）
 - 3 事例研修・質疑応答
 - （1）酒田市の小中一貫教育の取組みについて
講師：酒田市教育委員会学校教育課 課長補佐 齋藤正光 氏
 - （2）新庄市立萩野学園の取組みについて
講師：新庄市立萩野学園 校長 鈴木英樹 氏
 - 4 その他
 - 5 閉会

2 会議録

■次第3（1）酒田市の小中一貫教育の取組みについて

◎事例研修…研修資料に基づき講師が説明

◎質疑応答

（委員）酒田市の7つの中学校区は、1つの小学校と1つの中学校になっているのか、複数の小学校と1つの中学校になっているのか。また、小学校統合を進めている学区もあるのか、教えて頂きたい。

（講師）中学校区の状況は様々である。第一・二・六中学区では、小学校が同じ中学校に行くのではなく、違う中学校に分かれている。泉小、浜田小は、それぞれで中学校が分かれて進学している状況である。第三中学区では松原小と亀ヶ崎小という大きな小学校が中学校の近くにあり小中一貫教育は進めやすい。第四中学区は広い学区で、小学校が6校に対し中学校が1つである。この学区は少子化が著しく複式学級が進み、今後も拡大していくことから、今年度から統合の必要性について議論が進んでいる。旧平田町と旧松山町の区域が東部中学区だが、田沢小学校が南平田小に統合し、現在、南平田小と松山小が東部中学区の小学校である。旧八幡町の区域が鳥海八幡中学区だが、鳥海小、一條小、八幡小の小学校がある。課題もそれぞれにあり、先週から7つの中学区に説明を行っている。

（委員）1つの小学校から別々の中学校に進学したり、いろいろな小学校が1つの中学校に進学したり、いろいろな形態があるようだが、教育方針の共有や交流など小中一貫教育はスムーズに進んでいるのか。

（講師）スタートしたばかりなので、児童生徒の交流はこれからである。今は小学校、中学校の授業スタイルや教育文化を小中一貫教育になじませていこうとしている。例えば、泉小では一中、六中に分かれて進学するが、泉小の教員は2つの中学校の教員と合同授業研究会を行っている。教員達の交流は様々な形で進んでいる。保護者の意見を聞き、このような状況を解消すべきという議論が高まれば、学区のあり方の検討も必要と考えている。

（委員）見えない学力を数値化で把握することについて、この数値はこれから3年間の変化を見ていくのか、それとも、小中一貫教育前の数値があり、それと今後3年間の数値を比較して検証していくのか、教えて頂きたい。

（講師）質問項目は全国学力学習状況調査の昨年度の項目を基に設定している。昨年度の本市小学6年生と中学3年生の数値があるので、これを基準とし、小学4年生から中学3年生までの6年のデータをとりながら、今後どのように変化していくのかを捉えようとしている。根の力でみると、昨年の結果では全国平均よりも高く、これまでも「根の力」を重視し、子ど

もを育ててきたことがうかがえる。ただし、見える学力については平均を下回っている。自己評価については、学年が上がるたびに下がる傾向があり、小学4年生では将来に夢があると肯定的な割合が高いが、中学3年生では低い。小学生と中学生の夢を一律に比べることは難しいが、小中一貫教育を進めていくなかで、自信をもつ中学3年生が増えるように子ども達を育てていきたい。

■次第3（2）新庄市立萩野学園の取組みについて

◎事例研修…研修資料に基づき講師が説明

◎質疑応答

（委員長）地域学校協働活動推進員を学校に置きたいという話は、学校に席を置く状態にしたいのか、それとも、学校運営協議会の正式な委員として入れたいのか、教えて頂きたい。

（講師）財源との兼ね合いはあるが、希望としては週に2回程度、半日でもよいので、学校に来て教員と一緒に打合せをし、アイデアを形にできればと考えている。それができれば、地域の力と学校の力の相乗効果が高まると考えている。

（委員）個人的には小中一貫校が現実的と考えている。体育館とグラウンドの数を教えて頂きたい。

（講師）グラウンドは1つで、サッカーと野球が交差することなくできる広さがある。体育館は大体育館と小体育館があり、1～4年生は小体育館を使い、5～9年生は大体育館を使う。2つ体育館があるので、部活動は、全部が毎日活動できる広さである。理科室は小学校用と中学校用の2つある。音楽室も同じく2つある。家庭科室は1つだが、明倫学園は2つある。技術室、美術室は1つずつある。図書館の蔵書数は文部科学省基準の2倍で2万冊を備えている。4つの学校の蔵書数が一緒になったためである。

（委員長）8～9年生が教科教室で授業しているとのことだが、自分の教室との関わりなど詳しく教えて頂きたい。

（講師）教科教室として、国語室、数学室、理科室、社会科室、英語室がある。これらの教室には、展示物や授業用教材を常時置くことができる利点がある。普通教室では教科が替わるたびに撤去しなければならないが、その必要がない。子ども達も分からないことがあれば、教科教室に行って振り返りをするができるのが利点である。ただ、全ての授業を教科教室で行っているのではなく、教科教室にはICT器具などが備え付けてあるので、それを使う場合は教科教室で授業をする。ただし教科教室が狭いのが難点である。

（委員）萩野学園に統合する前は、各小学校と地域が密接に仲良くつながっていたと思うが、統合したことにより地域との距離ができていて何か課題があれば教えて頂きたい。

(講師) 統合前の全ての行事を、統合後もできるかといえば本校はそうではない。例えば、相撲大会はできなかった。土俵はあるが大会運営が大変で、もし相撲大会を行うのであれば、地域で運営して頂きたいとお願いした。しかし、その他の大きな行事は大体を取り入れることができた。総合的な学習にうまく取り込むことができたのが要因である。また、総合的な学習には、多くの地域の方々が学習の手助けをして頂いている。このような学習を様々な学年で取り組むことにより、学校全体として地域との距離は保っていると考えている。

(委員) 日本では小学校6年間と中学校3年間が当たり前だが、海外では小中一貫教育をどのように取り組んでいるのか、知っていれば教えて頂きたい。

(事務局) アメリカでは、小学校は1～5年生、ミドルスクールが6～8年生、残り4年間はハイスクールというのが多い例である。

(委員) 萩野学園では、「4年－3年－2年」の3ブロック制をとっているが、この体制は義務教育学校では普通のあり方なのか、また、1学年3クラスあれば理想的とのことだが、これも一般的に義務教育学校の理想なのか、教えて頂きたい。

(講師) 理想と申し上げたのは私的な考えである。義務教育学校の形式として、戸沢学園は6－3制をとっている。全国的に見ると、「3年－4年－2年」「4年－3年－2年」「5年－4年」「6年－3年」の4パターンがある。多くの学校は「4年－3年－2年」を採用している。理由としては、思春期の年齢が早熟化し、中学生だったのが2年くらい早くなっているとの指摘がある。その時期にたくさんの教員が目を向けることで、ケアが行き届くのではないかと考えている。5年～7年生を1つのブロックにすることが機能的であり「4年－3年－2年制」の学校が圧倒的に多いと考えている。

(委員) 萩野学園では、最初から「4年－3年－2年」制でスタートしているのか。

(講師) 新庄市教育委員会ではどのようなシステムを採用するか検討を重ねて、「4年－3年－2年」制に決定した。

3 会議資料一覧

- ・次第
 - ・出席者名簿・席次
 - ・研修資料「酒田の小中一貫教育」
 - ・研修資料「萩野学園学校経営説明資料」
- ※当日投影のみの資料及び配布資料（リーフレット）あり

以 上